

号外 [5] (2011. 2. 27 配信)

小惑星探査機「はやぶさ」余話・その3:
「子ども・宇宙・未来の会」と的川泰宣会長の話

今年初め配信の第 32 号「はやぶさ」の話に関連し、「サロン便り」で著書を紹介し引用させて頂いた JAXA(宇宙航空研究開発機構)の名誉教授・的川泰宣(マトガワ・ヤスノリ)さん。今も JAXA の内外で宇宙開発事業に活躍中と聞いていましたら、何と、NPO 法人の会で、子どもたちに宇宙の夢を語っておられると知って驚きました。その「夢を語る」仕事とは? 的川さんの現況を記してみたいと考え、全国紙の休日特集版に載った記事を中心に、宇宙を夢見る子どもたちの集まりと遊びの様子を記して、「はやぶさ余話」の締めくくりとします。

初めに記した長い名前の「会」は、略称「KU - MA」。「クーマ」と呼びます。会員は昨年末現在約 350 人。特集版の記事によると、サッカーの全日本監督だった岡田武史さんも会員に名を連ね、全国約 20 ヲ所で開催「宇宙の学校」で、会員の子もたち、主に小学校低学年の児童と親たちに、実験や工作を通じて宇宙の仕組みを教えています。

リーダー的川さんの熱弁の一端を読むと、「日本はこれから、さらにお金持ちの国ではなくなります。あなたたちが大人になる時代には、アジアのほかの国々にも抜かれるでしょう。その時、日本人として何が誇れますか?」

昨年 12 月には、立川市の「学校」で、皆既日食の観察について説明し、その後で、傘袋でロケットを作って飛ばしました。子どもたちも、教わりながら同じようにロケットを作って遊ぶ写真が紙面に大きく載っていました。男の子が大多数ですが、女の子の顔もちらほら見えました。

先生に教わって、自分で作って動かしてみる。小学校の理科の実験には欠かせない。うまくいけば嬉しい。失敗したらなぜかを考えたり教わって、作り直してやってみる。テレビでそんな実験教室を見ていると大人でも楽しい。男の子、女の子の別などありません。

第 33 号で、「はやぶさの目的は、人づくり」と記し、青少年に宇宙への関心を高める意義に触れましたが、的川さんは、なぜ、子どもたちの教育にかくも熱心なのでしょう? 紙面では、こう答えています。

「日本という国は、昔から海外に目が向かない。聖徳太子の時代、幕末・明治など世界に目を見開いた時代も、海外から受け入れた文化を日本向けに改造するのに力を発揮しただけ。でも、もう受け入れているだけではダメな時代です。日本に築いたものを、日本から積極的に発信して、世界の国々のために貢献するという立場にならなければ、21 世紀に生き残れない」。

「軍事力と経済力に優れた国が世界をリードする時代はやがて終わり、21 世紀は、科学技術や心の面で優れた国が世界をリードする。だからこそ、日本は教育に力を入れ、そのようなリーダーを育てるべきです」。

生き方の考えが変わったのはいつごろですか? と尋ねると、ほとんどの人が小学 5 年生ぐらいとおっしゃるそうです。私たちの子ども時代は、あの忌まわしい戦中・戦後のさなかで、大なり小なり戦争の影響を受けてきましたから、生き方を変えた、というより、生き方を決めた時点が、十代の中頃だったな、と回顧しています。小学 5 年生と聞くと、随分、早いなあ、と思いますが、戦後の進歩著しい社会では、考え方が早まってむしろ当然でしょう。的川さん自身も、5 年生の時、『クオレ 愛

の学校』を読んで、人が幸せになれる社会を作るのが一生のテーマだと強く思ったそうです。

もっとも、宇宙の仕事始めてから、忙しくてその思いを忘れていた由で、そのような思いが、宇宙から受ける豊かで多面的な心を育てなければと、「クーマ」を主宰する現状に至ったように感じ取れます。

NPO 法人の名称を決めるに当たって、会長自身、随分悩んで、「子ども」と「未来」の真ん中を、「宇宙」がつなぐ形にしたといわれます。通称「KU...MA」は、漢字では「空馬」と読めます。「宇宙」という概念は、理科系だけのものではなく、宇宙を考えて作曲する人もいれば、宇宙を描く人もいます。とても多面的。もちろん、日本が科学技術を先頭に掲げることは非常に大切だけれど…。的川会長の話を、目の前で聞いているような思いで、機会があれば、どこかの「宇宙の学校」へ見学に出かけてみたいという気持ちになってきました。

ところで、サッカーの岡田・前監督が会員の一人とはどうして？ そう思って、的川さんの著書『はやぶさ物語』を見直したら、岡田さんの推薦の辞が載っていました。「高い目表に向かって、スタッフが心を一つにして、はやぶさに苦難を乗り越えさせたことに感動すると共に、日本代表チームとたくさんの共通点があることに驚いた」と。彼を「クーマ」に誘導したのは「はやぶさ」の活動を支えた研究者・技術者のチーム力だったようです。

私が宇宙への関心を一層強くしたのも、「はやぶさ」の快挙と日本の科学技術・若い研究者チームへの期待でした。また宇宙の話題を取り上げることができる機会があればぜひ、と思っています。

(2月22日記。国際サブロー)